

看護部研修と連動した看護師への文献検索講習の事例報告

工藤彩

東京医科大学図書館

1. はじめに

東京医科大学図書館本館（以下、本館）では、平成 21（2009）年より、敷地内に隣接する東京医科大学病院（以下、大学病院）看護部からの依頼を受け、看護師を対象に文献検索講習を行ってきた。現在では、体系化された看護部の研修の一環として行っている。本報告では、過去から現在の文献検索講習会の実施を振り返り、問題点や課題を踏まえつつ、今後の展望を考えたい。

2. 背景

大学病院看護部では、臨床看護師育成システムが確立され、看護師はそれに沿って研修と自己研鑽をすすめている。その教育制度の中に、看護研究・看護論文執筆が含まれている。当初は図書館で契約しているデータベースを利用した網羅的な文献収集方法を案内する講習であったが、年々、適切な情報の判断等を含めた情報リテラシーの必要性、論文執筆の取り巻く状況の変化等があり、検索方法の習得だけにとどまらない研修の場として、看護師に有用な情報を提供する必要性が出てきた。

3. 問題点

現在では、図書館の紹介とともに論文執筆の構成を導入として、パソコンを利用した医中誌 Web、最新看護索引 Web の検索実習後に、文献入手方法や電子ジャーナルの利用方法の案内を行っている。また、業務の合間を割り研修に参加する看護師のため、文献入手までの流れを説明し、電子ジャーナルを含め図書館の書架で文献にたどり着くまでの、より実践的な講習内容としている。

近年では受講者の文献検索に対する知識の不均衡が挙げられ、複数スタッフが見回り、個別に対応することを心がけているが、一律の研修内容を企画することの難しさを抱えている。

4. 考察

毎回、講習会後に受講者の理解度やデータベースの種類・使い方についてアンケートを集計し、次年度以降の参考としている。また、講習前に行われる看護部との事前打合せでその受講者の研究テーマやニーズ等を把握し、講習会の内容を決めている。本館職員にとってもデータベースの使い方、新しい機能の確認等、改めて教える立場としての学びも多く、貴重な機会となっている。

受講者のレベル設定を見極めつつ、講習としては引き続き、受講者に文献への理解と看護研究における情報収集の必要性を説くことを主軸に、今後もより丁寧な講習を行っていきたい。